

山中で死者がでる険しい道を迂回するための「青の洞門」をつくった禅海和尚。  
二重螺旋のスロープで上りと下りが別通路という独特の建築様式である  
「栄螺堂(円通三匠堂)」を考案した郁堂和尚。  
人のために人生をかけた和尚、斬新奇抜な発想を持っていた和尚が江戸時代後期に活躍していた。

# 偉人伝

the life of a great person

土木  
建築

VOL.4

建築

「生没年不詳」

## 郁堂和尚

Ikudo osyo

世界で唯一の  
木造螺旋構造のお堂  
「栄螺堂」を考案した



郁堂和尚は、福島県会津若松市飯森山にある正宗寺(しょうそうじ)の住職であった。1796(寛政8)年、郁堂和尚が提案し、飯森山の中腹に完成したのが「円通三匠堂(えんつうさんそうどう)」である。その外観から「栄螺堂」と呼ばれるようになった。六角形の建物には、中心部の観音像を囲うように二重の螺旋階段が置かれている。この螺旋階段は上りと下りで分かれており、それぞれの参拝者とは決して交わらない。多くの学者が、この特殊な構造に注目して研究を行っており、江戸時代、オランダから輸入された洋書に描かれた二重螺旋階段のスケッチから着想を得たのではないかと考察する学者もいる。

しかし、西欧が単なる通路であったのに対し、「栄螺堂」は、中心部に配置された観音像を回覧する仕組みになっていることから、単なる模倣ではなく、天才的な創造と評価されている。二重螺旋構造の木造建築は世界的にも例がなく、特異性から1995(平成8)年、国の重要文化財に指定され、今なお多くの人々に親しまれている。このような独創的な構想を持った和尚は、他にいないだろう。

土木

「出生年不詳」一七七四年

## 禅海和尚

Zenkai osyo

三十年の歳月をかけて  
鑿と鎚だけで岩を掘り抜き  
「青の洞門」を開削した



禅海和尚は、越後高田の藩士福原氏が先祖であり、本名は福原市九郎。江戸・浅草で暮らしていたが、両親の死後、曹洞宗に出家し「真如庵禅海」という戒名を授かる。1735(享保20)年、禅海が回国行者として豊前国耶馬溪を訪れた際、川沿いの断崖にかけられた栈道で死者が多数であることを知り、後に「青の洞門」と呼ばれる隧道の開削を決意。周辺の村民らと協力し鑿と鎚で岩を掘り続け、30年という歳月をかけて、1763(宝暦13)年に貫通させた。

その後、引き続き行われた整備の工費に充てるため、道行く人々から通行料をもらっていた。これほどの偉業を成し遂げたにも関わらず、出生・経歴にまつわる資料がほとんど残っておらず、諸説が飛び交う謎多き人物である。大分県中津市にある「禅海堂」には、禅海が開削時に使用した鑿、鎚、鈴などの数少ない貴重な資料が保管されている。

なお、1919(大正8)年に発表された菊池寛の小説『恩讐の彼方に』は、青の洞門を開削した禅海和尚の史実を取材して書かれた作品である。